

## 英語教材としての映画スクリプト (2): Way 構文に関して

### Movie Scripts for English Learning/Teaching Material (2): On the *Way* Construction

飯田泰弘

IIDA Yasuhiro

#### 1. はじめに：移動を表す表現

英語の移動を表す動詞には、その一語の中に具体的な移動の様態まで含んでいるものが多い。例えば「歩く」を意味する動詞のいくつかを (1) で確認しても、副詞や擬音語・擬態語などを添えなければならぬ日本語とは違い、英語では動詞一語で表現できることが分かる。

- (1) *amble* ゆっくりと歩く、*bowl* すいすいと歩く、*creep* 忍び足で歩く、*hobble* よたよた歩く、*lumber* のしのし歩く、*lurch* よろめきながら歩く、*mosey* ぶらぶら歩く、*pad* 足音を立てずに歩く、*parade* 練り歩く、*plod* とぼとぼ歩く、*ramble* ぶらぶら歩く、*roam* 歩き回る、*rove* さまよい歩く、*saunter* のんびり散歩する、*shamble* よろよろ歩く、*shuffle* 足を引きずって歩く、*slouch* 前かがみに歩く、*stagger* よろめき歩く、*stray* 迷い歩く、*stride* 大股で歩く、*strut* 気取って歩く、*swagger* 威張って歩く、*tiptoe* つま先で歩く、*toddle* よちよち歩く、*totter* よろめき歩く、*tramp* ドシンドシン歩く、*waddle* よちよち歩く  
(田中・松本 1997: 131-132)

歩き方の具体的な様態を示さない *walk* は日本の英語教育でも初期に登場するが、そこから (1) の動詞群の正確な使い分けまでマスターしようとする、日本の英語学習者にとってはハードルが高くなる。そのような場合の効果的な教え方のひとつには、実際の歩き方を実演し、そのイメージと共に説明するというものがあるだろう。そうすれば、英単語と日本語訳を (1) のように文字だけで示されるよりも、互いの動詞の違いが頭に入ってきやすくなることが期待できる。

英語の構文でも、このような移動とその具体的な様子(様態や手段)が示されるケースがある。*Way* 構文 (*Way Construction*) と呼ばれる構文で、Jackendoff (1990) や Greenberg (1995) を筆頭に、これまで数々の分析がなされている (e.g., Salkoff 1988, Marantz 1992, Goldberg 1995, Levin and Rapoport 1995, 影山・由本 1997, 高見・久野 2002)。典型的な例を (2) で見てみよう。

- (2) a. The demonstrators pushed their way into the building. (Goldberg 1995: 208)  
 b. Bill belched his way out of the restaurant. (Jackendoff 1990: 211)  
 c. Joe bought his way into the exclusive country club. (Goldberg 1995: 205)

(2a) では、デモ隊が「(人混みなどを)押し分けて」という建物に入る際の手段が、(2b) ではゲップをしながらという、ビルのレストランから出る際の様態が表されている。また (2c) は、ジョーがお金にものを言わせて高級カントリークラブに入会したという解釈が可能で、物理的な移動というよりは主語の状態変化が示されており、この場合も、ある状態から別の新しい状態への主語の「移動」と考えることができる。このように、手段や様態を具体的に示し、広義での「移動」を表すというのが *Way* 構文の特性である。

すでに分かるように、*Way* 構文には手段や様態、さらには物理的移動や主語の状態変化などの複数の解釈が存在し、この構文の適切な解釈には、動詞の語彙的特徴や文脈、発話時の状況などを総合的に捉えて判断しなければならない。つまり *Way* 構文をきちんと理解するためには、文中にある各単語

の意味を単純に足していくだけでは不十分ということである。

本稿においては、日本の英語学習者が Way 構文の理解を深めるには、映画が非常に有効的な教材になることを論じる。<sup>1</sup> この大きな理由には、(1) の動詞群の使い分けと同様に、移動を意味する Way 構文の理解には、映像で実際の動きを見ることが非常に大きな手助けとなることがある。また主語の状態変化など「比喩的な移動」に関しても、映画であれば文脈が容易に把握でき、実際の Way 構文がどのような手段や様態を表すために用いられたかが判断しやすくなる。このような点を踏まえ、まず 2 節では Way 構文の基本的な振る舞いを先行研究の分析や議論をもとに概観する。次いで 3 節では、現在の日本の英語教育現場でも Way 構文の実例が散見されることを示す。そして 4 節では英語教材としての映画の魅力を指摘したのち、5 節と 6 節では具体的な実例を用いた映画の活用法の一試案や、映画の使用上の注意点を提示する。7 節は本稿のまとめである。

## 2. Way 構文の基本情報

Way 構文は非常に生産性が高い構文であり、基本的な式型は次のようになる。

(3) 主語 + 行為動詞 + one's way + [ 方向・経路・着点の前置詞句 / 副詞 ]

現在では多種多様な動詞の生起を許す Way 構文であるが、歴史的には *make one's way to* ~ 「～への自分の道を作り出す」の形に由来するという指摘があり (e.g., 国広 1970, Salkoff 1988, Goldberg 1995)、Salkoff (1988) は現在の Way 構文に使われる動詞は、*make* との融合 (fusion) によって派生すると分析している。すなわち、(2a) で見た *push one's way through* ~ は、*make one's way through* ~ by pushing を融合したものという考え方である。歴史的な使用例を見ても、*make* を使った Way 構文は古くから多く見つかるようだが (e.g., Israel 1996)、現在ではもはや *make* との関係性を越えた幅広い派生を見せている。<sup>2</sup> これを踏まえて、さらにこの構文の具体的な特徴を文法と意味に分けて概観しよう。

### 2.1 文法的特徴

まずは (4) の文を使って、文法的な特徴を確認する。

(4) He pushed his way through the crowd.

一つ目に、Way 構文では *one's* の部分は必須で、*the* などとの書き換えは許されない。また *one* の指示対象は必ず文の主語と一致する。次に、*way* は常に単数形でなければならず、たとえ主語が複数を表す場合でも単数形が求められる (\*They pushed their ways through the crowd.)。さらに、Way 構文には方向・経路・着点などを表す表現が必要であり、この要素を持たない *He pushed his way.* は文法上は成立するが、意味は「彼は自分の道を押した」という奇妙なものとなり、移動の意味も完全に消える。

最後に、Way 構文では動詞と *one's way* の間に別の要素の介入ができない点を取り上げよう (\*He pushed forcefully his way through the crowd.)。この事実は、他動詞と目的語の間には副詞などの要素が介在できない事実と似ており (\*The student has read easily/certainly the long story.)、そのため Way 構文における *one's way* の部分は、付加部ではなく補部であるという主張の根拠とされる。しかし一方で、Way 構文に本来は補部を取らない自動詞も生起できる事実は、この構文の興味深い点である (Tom yelled/shouted/moaned his way down the alley.)。例えば自動詞 *belch* は (2b) で見たように Way 構文を成立させるが、方向句を除いて Way 構文でない文にするとたちまち非文となる (\*He belched his way.)。

<sup>1</sup> 本稿ではドラマやアニメも含めて「映画」と呼ぶ。

<sup>2</sup> 例えば、現代英語の Way 構文では方向を表す句が必須だが、*make one's way* は方向句なしでも移動を表すことができるという統語的相違点がある。

## 2.2 意味的特徴

次に、意味的特徴に目を向けよう。Way 構文に移動の意味が含まれることはすでに触れたが、これはそもそも移動を表さない動詞 (e.g., *belch*, *dig*, *push*) においても同様である。<sup>3</sup>

- (5) a. Frank dug his way out of the prison. (Goldberg 1995: 199)  
 b. \* Frank dug his way out of the prison, but he hasn't gone yet. (Goldberg 1995: 200)

(5a) の文は直訳すれば「フランクは刑務所の外への道を掘った」となり、この日本語には「掘った」という行為の情報はあるが、そのあとフランクが外に移動したかは不明である。にもかかわらず、英語の Way 構文には移動の含意があるため、(5b) のように後半で移動を否定すれば、たちまち Way 構文は不自然になる。この事実が示唆するのは、文全体の意味は文の構成要素から形成されるという「構成性の原理 (Principle of Compositionality)」に、Way 構文は従わないということである。すなわち、文に出てくる単語の意味を単純に足していくだけでは文全体が持つ移動の意味は生まれられないため、構文そのものに「移動」の意味が備わっているという考え方が必要になる。

このほかにも Way 構文には、意味的に特殊な振る舞いが認められる。特にその中でも、複数の解釈が可能な点に関して、下で順に確認していく。

### 2.2.1 複数の解釈

まずは、物理的移動と比喩的移動の違いを見てみよう。(4) や (5a) で見た *push* や *dig* の Way 構文は、人混みをかき分けての移動や、刑務所からの脱出など、主語による物理的な移動を表していた。一方で (2c) で見た *buy* の文 ((6a) で再掲) や、(6b) の *sleep* を使っている「枕営業をする」という意味を生む文では、物理的な移動というよりも、主語の状態や社会的地位の変化を表している。

- (6) a. Joe bought his way into the exclusive country club. (Goldberg 1995: 205)  
 b. Sue slept her way to the top. (Jackendoff 1990: 213)

1 節で触れたように、このタイプの Way 構文においても、主語の状態が別の状態へと移行を遂げることが表されるため、広義の「移動」と考えることが可能である。よって本稿ではこのタイプの Way 構文を比喩的移動として扱う。そうすると、Way 構文には物理的移動と比喩的移動の 2 タイプが存在することになる。

さらに Way 構文は、別の観点からも 2 通りのタイプに分けることが可能である。それが「～することによって」を意味する手段 (means) 読みと、「～しながら」の意味になる様態 (manner) 読みである。例えば Jackendoff (1990) によれば、(7a) の文には、(7b) に書き換え可能な「ジョークをいうことで会議に入ってきた」という手段読みと、(7c) に書き換え可能な「ジョークをいいながら会議に入ってきた」という様態読みがあるとされ、これらは文脈で判断することが求められる。

- (7) a. Sam joked his way into the meeting.  
 b. Sam got into the meeting by joking. (means)  
 c. Sam went into the meeting (while) joking. (manner) (Goldberg 1990: 202)

<sup>3</sup> ただし、非有界的な表現が使われた場合はこの限りではないとされる。

### 2.2.2 困難性の含意

2節の冒頭で触れたように、Way 構文は *make one's way to* ~ から由来するとの分析があり、この構文には「道なき道を切り拓いて進む」といったニュアンスが備わっている。そのため、手段読みの場合はとりわけ、その移動には困難性が伴うことが指摘されている。例えば *Sally made her way into the ballroom.* の文の場合、Goldberg (1995: 202) によれば、Sally が人混みなどの障害物を乗り越えて進んだという意味が出るが、逆に、難なく舞踏室へ歩いて入って行った場合にはこの文は使えないとされる。また、(8a) と (8b) の容認性の差は、グラス一杯分のレモネードを飲み干す場合と、ウォッカを1ケース飲み干す場合との困難性の違いに起因するとされる。

(8) a. ??Sally drank her way through the glass of lemonade. (Goldberg 1995: 204)

b. Sally drank her way through a case of vodka. (Goldberg 1995: 204)

このような困難性の含意は、移動を表す他の動詞 (e.g., *come, go, move*) には存在しないため、Way 構文の大きな意味的特徴と言える。

以上、ここまでの意味的特徴をまとめると Way 構文には、物理的移動と比喩的移動、および、手段と様態といった、複数の解釈が可能であり、さらに手段読みの場合には困難性も含意されることが分かった。

## 3. 日本の学校教育現場での扱い

ここまで確認した Way 構文の複雑な特性を見れば、日本の英語教育でこの構文を扱うのは難しいと感じるかもしれない。しかし実際には、2020年1月に実施された2021年度センター試験では、大問5の長文内で *make* を使った Way 構文が、「家に帰った」という意味で登場している。(下線は筆者)

(9) After a while on the mountaintop, I attached the name tag to my old friend and carefully made my way home with the mountain's gift beside me. My soul felt very much complete.

また、高校生向けの英語教材の『英語の構文 150 - Second Edition -』では“*make + one's way + 方向*”の紹介セクションがあり、*elbow, grope, lie, shot, buy* など様々な動詞を用いた Way 構文が紹介されている。加えて、手段読みと様態読みの違いや、移動の含意に関する言及さえもある。

このような事実を鑑みれば、特異な性質を持つ Way 構文も、高校レベルの英語では目にするのが皆無ではないことが分かる。となれば、高校以上の英語の授業で Way 構文を紹介することには重要な意義が出てくる。そこで以下では、英語授業に Way 構文を導入する際に、映画が非常に効果的な教材となることを主張する。

## 4. 映画スクリプトの英語教材としての魅力

本稿のここまでの議論をまとめると、Way 構文には特異な文法的、意味的な振る舞いが多数確認でき、一筋縄ではいかない構文であることがわかった。それでいて、日本の英語教育現場でも、Way 構文を(少なくとも高校以上の)英語学習者が目にする機会があることを確認した。これはつまり、Way 構文を言語学の学問的議論のみに留めるのではなく、積極的にその特性を英語学習者にも紹介すべきであることを示唆している。

しかし一方で、日本の英語教育で Way 構文を積極的に取り入れることが可能かということ、そうとも限らない。授業時間数の制限などもあり、教育現場で Way 構文のような特異な構文を詳しく扱うには限界がある。では英語学習者にどのように提供できるかと言えば、教員がこの構文に関して適宜、

補助教材等を用意して授業に導入するというやり方が考えられる。これを踏まえて以降では、映画を補助教材として活用する一試案を提示する。映画には先行研究で紹介されていない希少な実例が確認されたり、物理的移動や Way 構文の発話に至る文脈を実際の映像で明確に確認できたりと、教材としての魅力が多数含まれている。このような幅広い用途に対応できるのは、そもそも英語教材としては製作されていない映画ならではの特権である。

例えば、**find** を使った Way 構文のセリフを見てみよう。<sup>4</sup>

(10) At some point, your father **found his way** to Japan. <00:32:08> (*Zoo*, S(eason)1, E(pisode)1, 2015)

ここでの Way 構文を直訳すれば「あなたの父は日本への道を見つけた」となり、父親が実際に日本に行ったのかは分からない。しかしこのシーンの字幕は「あの人は日本に行っていた」となっているため、このセリフと字幕を提示するだけでも、日本の英語学習者に移動の含意という特性を伝えることができる。<sup>5</sup> このほか、映画の教材としての魅力を、とりわけ意味的特徴に焦点を当てながら見ていこう。

## 5. Way 構文の解釈

すでに確認したように、Way 構文には物理的移動と比喩的移動、あるいは手段読みと様態読みといった、複数の解釈が存在する。本節ではこの違いを映画の実例を用いることで、学習者のより確実な理解の定着へとつなげる方法を考えたい。

### 5.1 物理的移動か比喩的移動か

まず、物理的移動と比喩的移動の両タイプを考えてみたい。前者は文字通り人や物の移動を意味し、「移動」とは「時間の流れに沿った物体の位置変化」(田中・松本 1997) のことと考える。一方、後者が表すのは主語の状態や社会的地位等の変化である。この 2 タイプの違いは、どのような動詞が用いられるかにも大きく左右されるが、ここでは同じ動詞が両方の解釈を生むケースを観察し、その活用法を考えたい。まずは **dig** の例を見てみよう。

(11) a. There's an exit. It's a few yards behind you. But you'll have to **dig your way** out. <00:21:42> (*Zoo*, S2, E4, 2016)  
b. It's not easy for girls like us to **dig our way** out. <00:34:53> (*Game of Thrones*, S3, E1, 2013)

(11a) は、地中の小さな穴を這って進んでいる相手に対し、すぐに穴から逃げ出すよう指示を出すセリフである。よってこのシーンの **dig** は実際に穴を掘ることを指し、物理的移動の Way 構文であることが分かる。一方で (11b) のセリフは、身分の低い女性同士の会話で発せられており、「自分たちのような人間の出世は簡単ではない」という意味で Way 構文が使われている。よってここでの **dig** は、自分が置かれた社会的地位からの打破を意味し、比喩的な移動を表すことが分かる。実際の映像を確認しても、(11a) はほふく前進をする相手に発せられ、(11b) は身の上話をするシーンでの発話であるため、学習者は同じ動詞であっても、Way 構文は物理的移動と比喩的移動の両方を表す機能を持つことを把握することができる。

同様の観点で、**fight** の例も見てみよう。

<sup>4</sup> 本稿では、映画スクリプト内の太字下線は筆者によるものである。

<sup>5</sup> ただし、**will** など未来の表現が使われている場合は、必ずしも字幕は役に立つわけではない。次のセリフの字幕は「必ずやご先祖の元に向かわれる」となっており、移動の完結がそこに本当に含まれているかは分かりにくくなる。

(i) His spirit will **find its way** to the halls of your fathers. <01:05:25> (*The Lord of the Rings: The Two Towers*, 2002)

- (12) a. My father **fought his way** into Jotunheim. <00:13:59> (*Thor*, 2011)  
 b. The only two things I can think of to help him are to pray and to hope that if you're with him, he'll feel that love for you and it will give him a reason to **fight his way** back to us. <00:38:53> (*9-1-1*, S1, E3, 2018)

(12a) は、ヨトゥンヘイムという国へ侵攻した父親のことを述べており、ただ戦っただけではなく、実際に敵国へと攻め入ったという物理的移動が示されている。一方で (12b) では、交通事故で昏睡状態の友人が、その危機的状況に打ち勝って目を覚ますことが表されている。よってこの場合は、主語の状態変化を表しており、比喩的移動であることがよく分かる。

最後に、make の例を見てみる。

- (13) a. Now, heart stays here, as O **makes his way** over here. <00:58:46> (*Oz: The Great and Powerful*, 2013)  
 b. I'm starting with the obvious suspects, **making my way** down the list. <00:12:20> (*Salvation*, S2, E4, 2018)

(13a) では、このあと実施される作戦の段取りを、ハートや丸のマークを地面に描いて確認している。そして Way 構文の発話時には、丸マークが移動する方向を地面に線を引きながら示すので、映像からは物理的移動であることが確認しやすい。一方で (13b) では、「リストに目を通す」という視線の移動、すなわち比喩的移動が表されている。この「目を通す」という意味では、移動を表す動詞 go も go through/over the list のように使える事実があるので、go の物理的移動と比喩的移動の用法と併せて、Way 構文の学びを提供することができる。

ここまで dig、fight、make の考察から、同じ動詞であっても物理的移動と比喩的移動の両方を Way 構文は表せることを確認した。また、映画を使えば映像を通して物理的移動が把握しやすくなり、比喩的移動のシーンも提示すれば、この2タイプの解釈の存在が明確に捉えられることを示した。

## 5.2 手段読みか様態読みか

次に、手段読みと様態読みの解釈に関して考えてみる。既述のように、前者は「～することによって」の意味になり、後者は「～しながら」の意味になる。これを踏まえて、次の例を見てみよう。

- (14) a. We ate our way across the U.S. (Jackendoff 1990: 212)  
 b. We went across the U.S. eating. (Jackendoff 1990: 214)  
 c. We got across the U.S. by eating. (Jackendoff 1990: 214)

Jackendoff は、(14a) の Way 構文には様態読みと手段読みが可能としており、それぞれ (14b) と (14c) にパラフレーズされる。まず様態読みの場合は、食事をしながらアメリカを旅したといった意味になるだろう。一方で手段読みの場合は、どこまで容認性が保たれるかは怪しい。手段読みの場合は、その動詞が表す行為によって道を作る (creation of a path) というニュアンスを出すため、push や elbow のような動詞に比べると、eat することで道を作るという状況は現実世界では限られる気がする。しいて言えば、お菓子の家から外に出るために壁を食べ、脱出路を作るなどの場合は容認性が上がる可能性はある。<sup>6</sup> つまり、Way 構文の容認性には、我々が持つ世界的知識も大きく関わってくるのである。

これを踏まえて、次の映画での Way 構文の使用を見てみよう。ポイントは、このセリフは人を喰らうゾンビが蔓延る世界で発せられたものという点である。

<sup>6</sup> ただし筆者が尋ねたインフォーマントからは、お菓子の家の壁を食べて穴を空け、そこから移動する場合には、eat ではなく dig を用いた Way 構文を使うという返答を得た。

- (15) Dr. Caldwell : The mothers were there, too. They were... empty. Cored. All their organs devoured.  
 Melanie : By hungries?  
 Dr. Caldwell : No. From the inside.  
 Melanie : Babies can't eat people.  
 Dr. Caldwell : These ones did. The mothers were probably all infected at once, in a single incident.  
 Then the embryos they were carrying took the infection as well... through the placenta.  
 They **ate their way** out. <00:52:04> (*The Girl with All the Gifts*, 2016)

会話の状況としては、まず Dr. Caldwell が産院で発見された妊婦の遺体は、臓器が何者かに食べられて体内が空っぽであったと述べ、Melanie がそれはゾンビ (hungries) の仕業かと問うている。それに対して Dr. Caldwell は、外部からではなく臓器は内部から食べられていたので胎児の仕業であると述べ、ゾンビ化した胎児たちは母親のお腹を貪り食うことで、体外へと出たのだと説明している。文脈から分かるように、この場合の eat は明らかに道を作るための手段であり、Way 構文の手段読みが保証されることになる。すなわち、我々の現実社会ではあり得ない状況さえも生み出してくれるのが映画であり、(15) のような会話を使えば、英語学習者にとって分かりやすい eat の手段読みの例示が可能になるのである。

同じく、ゾンビが蔓延る世紀末を描いた作品の (16) の会話を用いて、手段読みが持つ困難性の含意についても考えてみよう。ここでは、敵の陣地に潜入する方法が話し合われている。

- (16) Daryl : He got muscles?  
 Michonne : Paramilitary wannabes. They have armed sentries on every wall.  
 Rick : You know a way in?  
 Michonne : The place is secure from walkers, but we could **slip our way** through.  
 <00:11:48> (*The Walking Dead*, S3, E7, 2012)

Way 構文に至るまでの会話では、相手方には武装集団がいることや、敵陣地の周りにはゾンビ (walkers) がいることが話されている。このような文脈からは、敵陣地への侵入の困難性を感じることができ、そのうえで slip することで困難性をこえて移動することを Way 構文が上手く表現している。

以上、2つのホラー映画の例からは、Way 構文が発話される場面設定が重要であること、さらに、非現実的な状況設定までも叶えてくれるのが映画であることが分かった。これは英語教材として作られていない映画特有の魅力であり、このことから映画は、Way 構文が持つ手段読みと様態読みの解釈に対する理解を手助けしてくれる非常に有益な教材であると言える。

## 6. 映画スクリプトならではの学び

ここまで、映画を使えば Way 構文が持つ特性をより深く理解できることを示してきた。本節ではさらに、英語教材としての映画ならではの魅力に迫ってみたい。

### 6.1 いわゆる卑語からの学び

映画を教材として使用するには、当然デメリットも存在する。そのひとつが、子供向けのアニメ作品などを除けば、教育上望ましくない、いわゆる Fワードなどの卑語が出てくることがある。この点は映画英語教育に関する先行研究でも広く指摘されており、当然卑語の扱いには注意が必要で、英語授業で扱う映画やシーンの選定には慎重な判断が求められる。しかしここでは、新田 (1994: 20) が述べている『メリットがあれば当然デメリットもあります。特に、初期の英語学習者にはデメリットの

部分が重くのしかかってきます。しかし、考え方ひとつでデメリットはメリットに転換できます。』という考え方に従い、このような映画の性質さえも活用する方法を模索したい。まずは (6b) で見た Jackendoff (1990) の例 ((17b)で再掲) を考えてみよう。

- (17) a. \* Bill slept his way to New York. (Jackendoff 1990: 213)  
 b. Sue slept her way to the top. (Jackendoff 1990: 213)

同じ sleep を使っているにも関わらず、(17a-b) で容認性の差が出る理由は、行為性と状態性の違いによるものとされる。つまり、(17a) では「睡眠をとる」という状態性が出ており、この場合は主語による内的制限 (internal control) も効かないため、行為動詞を求める Way 構文とは相性が悪い。この点は倉田 (1995) が提案している、keep on ~ing を使ったテストでも支持が得られる。すなわち、「意識的に~という行為を繰り返し行う」という意味を持つ keep on ~ing は、「睡眠をとる」という意味の sleep とは共起できない (\*Bill kept on sleeping.)。

一方で (17b) の場合は、「睡眠をする」ではなく「枕を交わす」という意味での sleep の解釈が可能であり、この意味ならば Way 構文は容認性が上がるのである。これらを踏まえて次の実例を見てみよう。

- (18) You can't **fuck your way** out of everything. <00:06:02> (*Game of Thrones*, S2, E9, 2013)

ここでは、すぐ体を売り物にする女性に対して「何でもかんでも体で解決できるわけではない」という意味で Way 構文が使われている。よってこのような実例を使えば (17) での容認性の差を捉えることが容易になり、卑猥な表現さえも、扱い方ひとつでコトバの柔軟さを知る一助になってくれる。

## 6.2 言語学の複数の領域を横断的に見る学び

映画には時に、非常に複雑な言語現象が絡み合った Way 構文も登場する。(19) で、言語学の複数の分野にまたがるトピックを一度に学べる、橋渡し的な役割ができる例を見てみよう。

- (19) a. Do you know how many times I've seen cops **five-fingering their way** through a perp's spot? <00:41:20> (*Breakout Kings*, S1, E1, 2011)  
 b. That's why you **NASCAR'd your way** across Queens. <00:19:10> (*Breakout Kings*, S1, E1, 2011)  
 c. We'll **ninja our way** in. <00:31:34> (*Supernatural*, S6, E22, 2011)

まず (19a) では、five-finger が「万引きをする」という動詞で使われており、名詞から動詞への転換 (conversion) が起こっていることが分かる。

次に (19b) は、カーチェイスをして逃げようとした相手に対する刑事の発言であり、全体の意味は「モータースポーツのようにクイーンズ中を逃げ回った」になる。ここでは、まず National Association for Stock Car Auto Racing (全米自動車競争協会) が頭字語 (acronym) の NASCAR になり、次いで名詞から動詞への転換を受け、そして動詞用法となった NASCAR が過去時制を表す屈折接辞-ed を得て、Way 構文内に現れている。

そして (19c) では、まず英語に日本語からの借用語として ninja が取り入れられ、名詞から動詞への転換を受け、ninja が持つイメージの影響で「静かに移動する、忍び足で歩く」の動詞用法が生まれ、そして Way 構文に登場している。

このような実例は、多種多様な動詞を受け入れる Way 構文の柔軟性と、その生産性の高さを如実に



物語る好例である。そして教員がこれらの実例を英語学習者に対してうまく活用できれば、Way 構文を通して、転換や頭字語といった形態論的な話題や、借用語や外国語の流入といった社会言語学的なテーマへと話を広げることも可能になるのである。こういった非常に特異であり、それゆえに興味深さを味わえる実例を見せてくれるのも、やはり映画の大きな魅力である。

## 7. 教材としての映画の注意点

ここまで、Way 構文に対する多角的な学びを行うには、映画が非常に魅力的な教材となることを議論してきた。本節では最後に、Way 構文の学びの上で気を付けるべき点を二つ指摘したい。

一つ目は、Way 構文に生起する動詞に関してである。先行研究でよく典型例として挙がる動詞には、belch や moan や shout などがあるが、例えば岩田 (2012) による British National Corpus (BNC) での調べでは、これらの動詞の使用例は極めて少ないらしい。岩田 (2012: 88-89) が示した結果は次である。(括弧内の数字は見つかった用例の数)

### (20) a. よく使われるもの

make (1671); find (956); work (422); force (202); push (183); pick (173); fight (146); feel (108); pay (93); wind (88); weave (60); thread (57); claw (47); talk (45); edge (43); grope (41); wend (39); elbow, inch (35); eat, shoulder (31)

### b. 伝統的に例文に使われてきたもの

belch (1); moan (1); shout (0); whistle (1); yell (0)

(20) では、Way 構文の由来と言われる make が独り勝ちをしているが、一方で、(20b) にあるような動詞は使用頻度が非常に低いことがわかる。よって、Way 構文に関する学びを提供する際には、先行研究紹介に留まらず、この構文の実情などにも触れることが重要になる。

二つ目は、英語の実例採取として映画のセリフを使うリスクに関してである。次の例を見てみよう。

(21) Our most skilled guests will **fight their ways** to the outer limits of the park, besting fearsome braves, seducing nubile maidens, befriending tragically ill-fated sidekicks, and, of course, like all our best narratives over the years, our guests will have the privilege of getting to know the character they're most interested in. <00:54:06> (*Westworld*, S1, E2, 2016)

ここでは Way 構文と思われる箇所、way が複数形になっている。2.1 節の文法的特徴で確認したように、Way 構文ではたとえ主語が複数名詞であっても way には単数形の形態が求められるが、(21) ではその規則を違反している。この理由の詳細は定かではないが、考えうる可能性の一つには、演者の単なる言い間違いが挙げられる。このシーンでは、Way 構文と思われる表現が出るこのセリフは、(21) で分かるように一文が非常に長い。そのため、仮に映画スクリプトには単数形になっていたとしても、演者が言い間違い、しかし文全体の意味に大きな影響はでないため、このシーンの撮り直しをしなかったという可能性はある。

これまで、英語教材を目的に製作されるわけではない映画ならではの魅力として、多種多様な興味深い実例が見つかる点を指摘してきたが、逆に (21) のような例は、教材ではないがゆえの誤りの放置の例とも考えられる。このような例は誤用法として排除する目も、映画を教材として使う教員には必要になる。

## 8. おわりに

本稿では Way 構文の生産性の高さに着目し、映画の英語教材としての魅力を考えて。具体的には、映画を使えば Way 構文が持つ複数の解釈である、物理的移動と比喩的移動、および手段読みと様態読みの違いを、学習者により明確に示せることを確認した。また、教科書では見つからないような多彩な実例が見つかるのは、本来は教材目的ではない映画ならではの魅力である一方で、卑語や誤用法の英語が出てくる点に注意する必要性も併せて指摘した。

## 参考文献

- Goldberg, A.E. (1995). *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Israel, M. (1996). The way constructions grow. In Goldberg, A. (ed.) *Conceptual structure, discourse and language*, 217-230. Stanford: CSLI.
- Jackendoff, R. (1990). *Semantic Structures*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Levin, B. & M. Rappaport Havav. (1995). *Unaccusativity: At the syntax lexical semantics interface*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Maranz, A. P. (1992). The way constructions and the semantics of direct arguments in English. In Stowel, T. & Wehrli, E. (eds.) *Syntax and semantics 26: Syntax and the lexicon*, 179-188. New York: Academic Press.
- Salkoff, M. (1988). Analysis by Function, *Linguisticae Investigationes* 12, 49-84.
- 岩田彩志. (2012). 「Way 構文はどのような移動を表すのか？」 畠山雄二 (編著) 『日英語の構文研究から探る理論言語学の可能性』. pp. 85-97. 東京: 開拓社.
- 影山太郎・由本陽子. (1997). 『語形成と概念構造』. 東京: 研究社.
- 国広哲弥. (1970). 『意味の諸相』. 三省堂: 東京.
- 倉田誠. (1995). 「Way 構文の正体を求めて (1) —統語構造と意味構造の再考—」. 京都外国語大学英米語学科研究会『SELL』. 第11号. pp.32-41.
- 高見健一・久野暉. (2002). 『日英語の自動詞構文』. 東京: 研究社.
- 田中茂範・松本曜. (1997). 『空間と移動の表現』. 東京: 研究社.
- 新田晴彦. (1994). 『スクリーンプレイ学習法—シナリオのからくり、セリフの成り立ち』. 愛知: スクリーンプレイ.

## 映画

- Anderson, B. (Director). (2015). Frist blood [Television series episode]. *Zoo*, United States: CBS Television Studios.
- Branagh, K. (Director). (2011). *Thor* [Motion picture]. United States: Paramount Pictures.
- Brown, B. (Director). (2018). Next of kin [Television series episode]. *9-1-1*, 20th Century Fox Television.
- Hood, G. (Director). (2011). Pilot [Television series episode]. *Breakout kings*, United States: Fox 21.
- Jackson, P. (Director). (2002). *The lord of the rings: The two towers* [Motion picture]. New Zealand & United States: New Line Cinema.
- Lerner, D. (Director). (2008). Indivisible [Television series episode]. *Salvation*, United States: CBS Television Studios.
- Lewis, R. J. (Director). (2016). Chestnut [Television series episode]. *Westworld*, United States: Warner Bros.
- McCarthy, C. (Director). (2017). *The girl with all the gifts* [Motion picture] United Kingdom: BFI Film Fund.
- Minahan, D. (Director). (2013). Valar dohaeris [Television series episode]. *Game of thrones*, United States: Home Box Office.
- Raimi, S. (Director). (2013). *Oz the great and powerful* [Motion picture]. United States: Walt Disney Pictures.
- Sackheim, D. (Director). (2012). When the dead come knocking [Television series episode]. *The walking dead*, American Movie Classics.
- Singer, R. (Director). (2011). The man who knew too much [Television series episode]. *Supernatural*, United States & Canada: Warner Bros.
- Solomon, D. (Director). (2016). The walls of Jericho. [Television series episode]. *Zoo*, Unites States: CBS Television Studios.